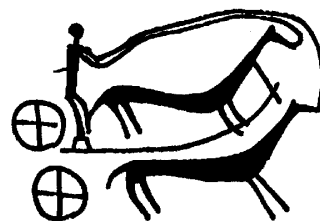


センターニュース

Center for Research and Development in Higher Education

北海道大学高等教育機能開発総合センター

Newsletter No.17



全学教育委員会の報告	4
6月の新任教官研修会のご案内	6
TA 研修会開催される	6
北大への期待	8
北海道大学公開講座のテーマ，講師決まる	9
センターの整備方針決まる	10
高等教育ジャーナル第3号出版される	10

巻頭言 FOREWORD

農学部附属施設を活用したフレッシュマン教育の試み プロジェクトの成果

農学部助教授 近藤 誠司

上記プロジェクトは，平成 9 年度教育改善推進経費（総長決裁経費）の内の「高等教育の改善」（研究代表者中村睦男）として農学部清水弘教授を代表とする研究グループによって行われたものである。このプロジェクトの背景・目的などについては，農学部大久保正彦教授が，本センターニュース（1997 年 15 号）にお書きになっているが，具体的な目標として，（1）自らの体験を通じた自然に対する総合的な理解・認識，（2）農業・畜産業・林業を通して自然と人間の関係を理解する，といった2点を掲げている。

プロジェクトには農学部のほか，低温科学研究所，地球環境科学研究科，獣医学研究科，高等教

育機能開発総合センター，言語文化部など非常に広い分野から参集した 18 名の教官によって行われた。12 月から学生の募集を開始し，1 月に締め切った結果，全部で 68 名（男子 33，女子 34 名，演習林コース希望者 28 名，牧場コース希望者 40 名）が応募した。実際の試行は両コースとも 3 月 2～6 日に実施し，それまでにいくつかの調整を行った結果，演習林コース 22 名，附属牧場コース 22 名が受講した。

期間中、演習林コースにおいては、4~5 kmの雪の森林内のスキーによるトレッキング、樹木・雪・水・野生動物痕跡の観察、造材現場での実際の伐採の見学といった得難い経験をした。さらに低温科学の専門家の指導によって雪の結晶のレプリカを作ったり、積雪の断面について深さ毎の密度や温度を測るといった専門的な実験法をかいま見るといった経験をした。そのほか、幌加内町の研修施設での笹紙作り実習、演習林近隣の大規模酪農経営の見学などを行った。

一方、牧場コースでは、全部で200頭余りの牛・馬の飼料給与・排泄物除去作業、1頭ごとの体重測定、初歩的な乗馬実習を行い、今までこうした大動物に触れたことのない1年生には、またとない体験となった。さらに牧場内の草地・森林、土壌、小河川、野生動物痕跡の観察を行った。牧場コースでは、附属牧場に滞在している大学院生が、ボランティアの形でこれら実習に参加し、積極的な役割を果たしてくれた。

両コースとも期間中、学生は4~5名のグループに分かれて活動し、現場での説明などは各専門の教官・技官（・大学院生）がグループ毎に対応した。本プロジェクトではグループ学習法を教育方

法として採り入れており、実習・観察に関する感想・討論や問題意識の整理・考察をそれぞれのグループで行わせた。教官は、学生の自主的な討論・考察を引き出すことを重視し、補助的な役割に徹した。最終日にはこのグループ毎に、それぞれテーマを設定し、論議の結果を自由形式で発表した。

さて、こうした実習が学生に与えた影響については、実習後に行ったアンケート調査の結果から生の声をいくつか拾い、紹介しよう。以下「」内が学生の声、（ ）内はコースと所属学部を示している。

「自然と農業（林業・畜産業）の関わり」については：「今後土木や建築の勉強をするときに絶対見方が変わった」（牧場，工），「木を切る＝自然破壊というイメージを完全に覆す1日」（演習林，水産），と自然や林業・畜産業など農業生産体系について、様々な実際の体験、さらに学生相互および教官・技官等との議論が問題意識を深めさせることができたものと思われる。また、「教室における講義」からだけでは得られないものとしては：「自然科学をとて難しいもののように捉えすぎていた。専門用語を必要以上に恐れてい

て、食わず嫌いをしていた」（演習林，経済）などがあり、実地体験が強いインパクトを学生に与え、今後の学習意欲をおおきく高めたことがうかがえる。

学生の小グループによる自主的な討論は、問題点の整理の仕方、討論の進め方・まとめ方、討論内容の発表方法などを学ばせるといった学生の積極性を引き出した面がうかがえる：「ディスカッションでは自分の意見をのべることで自分の考えがまとまり、人の反応からさらにその考えを

深めることができた」(牧場, 医)。

こうした分野の異なる学生・教官の交流ができ、様々な考え方・意見があることを理解することを学生は正直に評価している:「様々な分野の先生に直接専門の話を聞くことができたこと、友達が増えたことが良かった」(牧場, 農),「先生も学生も文系・理系混ざっていたことで色々な方向から考えることが学べた」(演習林, 農)。

農学部の附属施設の附属施設に対する感想には:「このような施設は北海道大学らしさを他大学,さらに日本全国にアピールできるものではないか」(牧場, 法),「せっかく演習林や牧場の施設があるのだから,もっと学生が利用できるこうした企画を増やして欲しい」(演習林, 農),などが挙げられた。こうしたコメントは,農学部の附属施設が単に専門分野の教育にだけでなく,幅広い全学教育に大きな役割を果たしうること,北海道大学の特徴ある教育に貢献しうる可能性が大きいことを示している。

なお,特に最終日の発表は演習林・牧場とも各グループ毎に非常に充実した内容であり,発表方法も OHP の応用,寸劇,ディベートなど工夫に富んだものであった。参加した教官にも,このプロジェクトは非常に大きな影響を与えたといっている。フレッシュマン教育に対する考え方のほか,グループ学習法など新たな教育方法への関心など,今後の大きな検討課題を与えられたものと受け取っている。

このプロジェクト推進における問題点をいくつか挙げておこう。一つは,このプロジェクトは志

小グループ討論

望者のみの少人数の学生(44名)に対する広範囲の専門分野教官(18名)が対応する限定された条件下での試行であったことである。もし,より多くの学生を対象に「単位修得科目」として実施した場合,多くの問題が生じる可能性は大きい。

また本プロジェクトの実施は各附属施設における技官の積極的な協力がなければなし得なかった。さらに,施設に滞在中の大学院生が,現場での説明,グループの結合・生活全般で果たした役割は非常に大きかった。今後は技官の位置づけとともに,こうした大学院生のティーチング・アシスタント的な役割を明確に位置づける必要があるだろう。

なお,女子学生が多かったこともあるが,数人の女子学生から「女性の教官が参加すべき」という指摘があったことも付記しておく。

今後,このプロジェクトをどのような形で進展させて行くか,現在検討中である。できれば,さらに積極的に発展させていきたいといった意向もある。また一部の教官からは,他の学部の施設も利用したおおきなムーブメントになれば,といった声も挙がっている。

全学教育 GENERAL EDUCATION

総合講義「北海道大学の人と学問」はじまる

センターニュース 15号でお知らせした表題の総合講義が去る4月10日から開始されました。これは総長、副学長、学部長など本学を代表する人たちが、自分の研究を中心に本学における学問研究の流れと現状を解説するものです。この日は丹保総長が本学の創立のころから始めて、これまでの流れについて概説しました。新入生にとっては最初の講義ということもあり、600人収容の大講堂は満員の盛況で、総長の力強い講義に聴き入っていました。

全学教育委員会の報告

3月4日に第18回(平成9年度第6回)全学教育委員会が開催され、つぎのような議題について話し合われました。

議題1. 平成10年度全学教育科目TAの任用

議題2. TAの研修

議題3. その他

1) 学生委員会第三小委員会委員の選出

2) 修学相談室

報告事項1. 平成10年度クラス担任全体会議

報告事項2. その他

議題1では関係学部より推薦願ったTA候補者の提示があり、これをTA候補者として任用したい旨、諮られ了承されました。これにもとづいて、必要経費は、高度化推進特別経費「全学教育科

目」TA経費として、文部省に要求すること、またTAの任用決定は次回(3月11日)のセンター運営委員会で審議されるとの説明がありました。議題2では、高等教育開発研究部においてTAの研修の実施を考えており、その原案が示され、審議の結果全学教育科目に関わるTAを対象とする研修であることを確認して実施することが了承されました。議題3では、まず学生委員会第三小委員会設置に伴って、本委員会から2名の委員を選出することとなっているが、1名は現在、言語文化部推薦の委員をお願いしているが、もう1名の委員を文学部身崎委員をお願いしたい旨提案があり、了承されました。つぎに、昨年度から試行的に開設されていた修学相談室について、現在までの相談内容であれば教務課窓口で対応可能であり、クラス担任等教官に関わる修学相談室については関係委員会

で検討の必要もあり、本学学生相談室との調整も必要であるので当面、休止とすることで了承されました。

報告事項 1 では 4 月 7 日の新入生オリエンテーション実施に向けて、全学教育科目の履修についてのガイダンス等をクラス担任に周知するために、クラス担任全体会議を 3 月 23 日 13 時 30 分から総長の出席を得て開催する旨、報告がありました。また、センター点検評価委員会委員の宮崎委員からクラス担任のアンケート結果について紹介があり、これを踏まえて全体会議では、履修ガイダンスとクラス担任のあり方について意見交換を行うこととしました。報告事項 2 としてつぎの 2 点が報告されました。

(1) 一般教育演習の履修者の選考方法

上記についての総合講義・一般教育演習専門委員会での検討結果について平尾委員よりつぎのとおり報告がありました：(a) 最初の授業で約 30 分のガイダンスを 2 回実施する、(b) 履修許可者の発表、受け入れ可能人数を発表する、(c) 履修者は 20 名とするが、担当教官の判断で 20 名を越えた場合は、最大限 50 名とする。

なお、一般教育演習担当教官には、この詳細と連絡法を個別にお知らせします。

(2) 試験実施のあり方に関する意見書

定期試験の監督にあたった経済学部助手有志から上記の意見書が全学教育部長あて提出されたことについて報告があり、4 月以降検討したい旨説明がありました。

高等教育

HIGHER EDUCATION

マーティン・トロア教授の予測

- 日本の大学はどこへ? -

カリフォルニア大学バークレー校のマーティン・トロア教授は 5 月 18 日に来日し、3 カ月にわたり本研究部で研究することが決定されました。日本の大学は、トロア教授の 1971 年の予測通り、エリート段階（当該人口に占める大学生が 15 % 未満）からマス段階（同 50 % 未満）へと着実に変貌してきました。第二次世界大戦後の新教育制度がこの変化にかりうじて対応しました。そして、われわれは今、未曾有の段階「ユニバーサル」（同 50 % 以上）に踏み込もうとしています。この移行に際しても、大きな変化・改革なしには対応しきれません。トロアモデルでは、ユニバーサル段階の大学は国民の「義務」として意識され、それなしの個人は著しい欠陥をもつものとして認識され

るであろうと推測しています。しかし、このような大規模な構造変化がいかにして起こるかは、それぞれの国の特性や歴史によるところが大きく、明確な予測は不可能です。トロア教授は 3 カ月の滞在期間中に、日本の大学をとりまく状況を把握し、より明瞭な日本の大学の将来像を研究する予定です。滞在中に数回の講演と論文の執筆を予定しておりますので、ご期待ください。

6月の新任教官研修会のご案内

学生中心型授業の体験も

「新任教官研修会」が6月4日(木)の北海道大学開学記念日に医学部臨床講堂で行われることになりました。昨年6月に引き続いて、今回で4回目になります。対象は昨年6月からこれまでに本学に赴任された教官全員です。昨年までの3回の試行の成果を比較・検討し、今年は実践的な面を重視して話題をとりあげました。北海道大学のありかた、高等教育の未来、学業成績評価のありかた、大学教官にかかわる法律についての話題提供と討論が予定されています。さらに、昨年試みて好評だった、学生中心型授業の体験のセッションを設けました。授業における学生とのコミュニケーション、学生間のコミュニケーションを促進する方法についての活発な討論が期待されます。

なお、この会は北大における教育に関するシンポジウムという一面ももっていますので、新任教官以外の方でも自由に参加し討論に加わっていただけます。希望者はあらかじめ連絡(Fax 内線4922, 西森)してください。資料を用意します。資料なしでよければ、当日参加も可能です。受け付けにお申し出下さい。

プログラム

日時：平成10年6月4日(木)

場所：医学部臨床講堂

9:25 - 9:30 あいさつ

9:30 - 10:00 新しい世紀への北大の展開

総長 丹保 憲仁

10:10 - 10:50 高等教育の未来

カリフォルニア州立大学バークレー校

マーティン・トロー(交渉中)

11:10 - 11:50 学業成績評価に関するアンケート調査

成績評価がこんなにバラバラでよいのか?

高等教育開発研究部長・医学部教授 阿部 和厚

12:00 - 13:30 (昼休み)

13:30 - 14:10 大学および大学教官にかかわる法律について

法学部教授 畠山 武道

14:30 - 16:30 学生が中心となって進行する授業

学生参加型授業の体験

世話人： 阿部 和厚

小笠原 正明

西森 敏之

細川 敏幸

TA 研修会開催される

TA (Teaching Assistant) 制度の導入とともに、多くの大学院生が学部教育(全学教育)に参加することになりました。この新制度は広い意味の大学院教育の一環として教師になるための重要な実地訓練の場を与えるものです。しかし、この制度が教育の一環として有効に機能するためには、それなりの準備が必要です。そのような準備教育の最初のステップとしての研修会が、3月23日学術交流会館において以下のようなプログラムのもと、本

学で初めて開催されました。

全学教育に携わる予定のTAのべ55名が参加し、活発な討論も交え大学教育の初歩を学びました。終了後回収したアンケートには積極的な意見も多く見られましたので、そのうちのいくつかをここに紹介いたします(無記名)。これらも含めて、アンケートの内容は今後の研修会の参考にしたいと考えております。

プログラム

< 午前の部 >

- はじめに (高等教育: 阿部和厚) (10:00-10:10)
 インストラクション (高等教育: 細川敏幸)
 (10:10-10:15)
 職務としての大学教育 (教育学部: 逸見勝亮)
 (10:15-11:05)
 休憩 (11:05-11:20).....
 北海道大学の全学教育 (総長: 丹保憲仁)
 (11:20-11:30)
 小人数教育の理論と実際 (高等教育: 阿部和厚)
 (11:30-12:30)

< 午後の部 >

- 論文・レポートの書き方の指導について (高等教育: 小笠原正明) (1:30-2:00)
 休憩 (2:00-2:10)
 実験指導のポイント (工学部: 米山輝子) (2:10-2:55)
 討論 (2:55-3:30)

参加者の意見

アンケートの回答

質問: 「本日のプログラム以外で次年度以降取り入れたほうがよいと考えるものがあればお教えください。」

- ・実際に参加して考えなければならないもの。
- ・学生と接するうえで必要な面接やプレゼンテーションあるいはコミュニケーションの取り方等の技術についての講義も有用なように思います。
- ・実験指導に関しては、もう少し普遍的な話があってもよいかもしれない。実験にはいろいろな形のものがあって難しいとは思いますが。
- ・実験は化学とそれ以外では大きく違うから物理などの内容についても触れて欲しい。
- ・実験系だけでなく、演習系の内容についても具体的に役立つようなプログラムがあれば、採り入れていただくとより良いのではないかと思います。
- ・各々が担当する科目に関する具体的な説明。
- ・理系文系を分けて、実際に役立つことだけを話

してほしい。

- ・TA をやったことのある人の話を入れてみる。

質問: 「本日のプログラムを良くするためのアイデアがありましたら記入してください。」

- ・少人数教育を実際にやってみるのはとてもよい試みだが、もう少し時間的余裕をもたせてじっくりやれば、より理解も深まると思う。
- ・参加者同士の話し合いをするのであれば、それに向けた部屋を使った方がよい。
- ・重要な点を短くはっきりわかるような形にすると思う。この時期は学会準備も多いだろうし、TA の講習をするなら、ほとんどの人が参加するようにプログラムを工夫すべきだ。
- ・「レポートの書き方」は一般学生の為の講義としてぜひ開講すべき。TA はそれを聞きに行ったらいい。本プログラムでは「レポートの採点」の方も重要だが少量にとどまった。
- ・もっとこまかくすぐに役立つことを聞けるようにしてほしい。

質問: 「その他、コメントがありましたらお書き下さい。」

- ・TA として学生と接する際の心構えや、TA 制度の背景についてたいへん勉強になりました。
- ・理系の大学院生の場合は、例年 3月末に学会発表がありその準備で忙しいため、研修会の時期を 4月以降または 2月以前に検討してほしい。
- ・TA についての制度的事柄、条件面等々、も説明がほしい。研究と教育の接点の話を幾人かの先生に聞いたかった。
- ・私はその昔、教師が志望だったので、TA の仕事は楽しんでやっている。また、自分の為になっているとも思う。
- ・総長はじめ講演者全てが、TA の必要性を説き、立派な理想を挙げた。が、実際に TA を任用する現場では手伝いの域を出ていない場合が多い。全学の教官に TA の制度の理念が浸透しているのか疑問だ。

手紙

LETTERS TO THE EDITOR

北大への期待

国立教育研究所生涯学習研究部室長 笹井 宏益
(前生涯学習計画研究部助教授)

「生涯学習」というと、ほとんどの人は、「ヒマな人がヒマつぶしにやる趣味的な学習のこと」ぐらいにしか思っていません。ましてや「生涯学習の推進」を天下の北海道大学が意図しているなどと言ったら「何を馬鹿なことを」と笑われるのがオチでしょう。確かに「生涯学習」にはそういった一面はあります。けれども見方を変えれば、そうしたイメージこそは、「生涯学習」について極めて貧困な発想しかできない、言い換えれば、教育や研究についてある固定的なイメージしか持ち得ない狭隘な見方に基づいているとも言えるのです。

「学校教育中心主義」。私が、平成7年7月から10年3月まで本センターの生涯学習計画研究部で仕事をさせてもらう中で、この考え方ほど強く意識したものはありません。日本における「生涯学習」の考え方は、学校教育の行き詰まりを打破し、学校教育を新しい段階にステップアップさせるために出てきた、いわば「学校教育改革論」を内包しているはずなのに、肝心の学校側においてはそのことがほとんど理解されておらず、学校教育の抱えている問題性を認識している人たちですら、学校教育に内在する論理でそれを解決しようとしている有り様です。

かつて東大教養学部の教員が、「知の技法」はじめ「知」に関する書物を刊行し、大きな話題となったことは記憶に新しいと思います。その編者の一人は、刊行の意図を「大学の教員一人ひとりが持っている『知の世界』と学生たちの求めている『知の世界』との距離を、言葉（叙述）の問題をとおして明らかにし、それを少しでも縮めた

かった」と述べています。ここでは、はからずも、これまでの学問が持ち続けてきた古典的なアカデミズムと学生たちの持っている「知(?)のパラダイム」との食い違いが暴露されているのですが、面白いのは、それが、出版という形を通じて、社会への問いかけとして行われたことです。なぜならば、社会人の持っている「知(or智慧)のパラダイム」は、大学の教員のそれとも学生たちのそれとも違うわけですから…。

あるアメリカ人エコノミストは、「日本人は全く先が見えていない。政治家は無謀で無意味なことばかりしている。日本のような経済力を持った国が平気で『無免許運転』をやっている。しかも人の言うことを聞こうともしない。日本には「馬の耳に念仏」という諺があるそうだが、日本人を説得するには、まず馬を説得して、その馬から日本人に話をしてもらおうほうがまだましだ…」と言っていました。考えてみれば「馬より話のわからない、先が見えていない日本人」はどこにでもあります。どうすればよいのでしょうか。

私は、それぞれ異なる『知の世界』を持っている人たちが、インターラクティブな関係を結ぶことこそが、極めて重要なのではないかと思います。大学は「知」によって構成され存在しているものですから、その必要性はほかの人の比ではありません。「生涯学習」の視点は、大学が抱えている様々な問題の解決にとって不可欠なものなの

です。

もし今の時代にクラーク博士が生きていたら、きっと「中年よ、大志を抱け！」と言うことでしょう。そのことは、大学が社会に開放される、つまり大学が改革されることによるのみ可能な

ことなのです。

短い間でしたけれども、母校で働けたことを幸せに思います。皆様方のご活躍を心より祈念いたします。

生涯学習

LIFELONG LEARNING

北海道大学公開講座のテーマ，講師決まる

今年度の公開講座のテーマは「21 世紀の北海道をひらく - 今あらためて『自立』を考える - 」と

なり、講師日程が以下のように決まりました。

表1 平成10年度の北海道大学公開講座

日程	講師	所属	講義題目
1 7月2日	山口二郎	法学部教授	地方分権と北海道
2 7月6日	井上久志	経済学部教授	21世紀の北海道経済の課題と可能性(仮題)
3 7月9日	神谷忠孝	文学部教授	文学からみた北海道の自立
4 7月13日	山本 強	大型計算機センター教授	北海道における情報産業の可能性(仮題)
5 7月16日	大田原高昭	農学部教授	21世紀の北海道産業(仮題)
6 7月20日	前沢政次	医学部附属病院教授	北海道における地域医療の未来
7 7月23日	廣吉勝治	水産学部教授	海洋新秩序のもとでの北海道の漁業
8 7月27日	嘉数侑昇	工学研究科教授	先端産業を巡る産官学の連携
9 7月30日	小林 甫	高等教育総合センター教授	北海道の発展と人づくり

各講師のテーマについては、若干変更の可能性がある。

なお、今年度については、公開講座の講義をもとに出版が計画され、現在公開講座専門委員会と

担当講師により、準備が進められています。

センター CENTER

センターの整備方針決まる

大学院重点化にともなう理学部庁舎の再開発が進んで、来年度中には現在センター内に研究室をもつ物理学科と生物学科の教官の研究室移転が実現するはこびとなりました。これを機会に、全学的な教育施設としてのセンター庁舎のあり方を見直すとともに、中・長期の施設整備計画を策定し、その第一歩として新しく生じる空間の改装を中心とする庁舎整備の具体案を作ることになりました。全学の施設・環境委員会の下に組織された施設計画（全学教育・情報処理教育）推進専門委員会（委員長：土岐祥介工学部長（当時））で検討し、評議会で了承された計画の概要は以下のとおりです。(1) エントランスロビーの新設：E棟の南側の西向きの部分にロビーを設け、人の流れをスムーズにするとともに、教務課窓口へのアクセ

スを容易にする。(2) 小教室群の整備：南側のN棟に9室の小教室を新設し、小人数のセミナーや語学教室用にあてる。(3) シアターコンプレックスの整備：1つの大講堂と2つの講義室からなるシアター型講義室群とE棟およびN棟を連結して大教室と小教室を組み合わせた「シアターコンプレックス」を整備し、新しいタイプの全学教育の展開に備える。(4) 情報処理教室の集中：現在あちこちに分散している情報処理のための教育施設を西側のN棟に集中する。(5) 非常勤講師室、クラス担任室の新設：N棟1階に非常勤講師およびクラス担任用の部屋を設ける。(6) E棟北側に事務室を設け、学務部の大部分を収容する。(7) その他、心理学学生実験室、生涯学習計画研究部の移転など。

高等教育ジャーナル第3号出版される

この号では、1997年9月25日から27日の3日間、「これからの大学教育と教育評価」と題して開催された高等教育に関する国際ワークショップの講演にもとづく論文が収録されています。

このワークショップでは、ハーバード大学の元学長であるロソフスキー教授をはじめ、アメリカ、イギリス、オーストリア、ロシア、韓国からの10名と日本人の11名の講演のすべてが、内容豊かで示唆に富み、日本の現状を国際的視点で比較でき有意義でした。

日本の読者の便宜をはかるため、英語の論文についてはすべて日本語訳を付けました。

以下に目次を掲載します。

高等教育における一般教育の新しい展開
21世紀への大学の展開（丹保 憲仁）
イングランドの一般教育 奇妙な例として
（マイケル・バレッジ）
ソヴィエト後のロシアにおける大学改革（ピョートル・シャリモフ）
大学・高校の多様化と大学入試（坂元 昂）
一般教育の新しい局面 自叙伝ではなく歴史
としてのカリキュラムの開発：ポートランド州
大学における一般教育改革のケーススタディ
（マイケル・リアドン）

大学改革への戦略的展開
日本の大学改革（天野 郁夫）
韓国の大学教育改革 ミニ大学を中心として
（朴 孟洙）

学部教育とファカルティ・ディヴェロップメント(有本 章)
マサチューセッツ大学(アマースト)における戦略計画(マルセレット・G・ウィリアムス)

教授法と教育評価

教師とアカデミズムの在り方(ヘンリー・ロソフスキー)
高等教育における学生・教師の意識変化(瀧上 凱令)
教授法の質の改善と証明(マーク・テナント,ジェフスコット)
教育の生産性とその評価(阿部 和厚)

アメリカのある大学における外国語上達度評価(パトリア・ウェッツェル, 渡辺 素和子)
北海道大学における英会話上達度試験(ジョセフ・トメイ)

市民センターとしての大学

キャンパスの歴史的建築(越野 武)
次世代型のキャンパス計画(小林 英嗣)
大学と市民社会を結ぶ(潮木 守一)
総合大学に芸術を(原田 康夫)
芸術学部をもつ総合大学として: 民主社会のための学生教育(ジョン・A・ジェンキンス)

センター日誌

CENTER EVENTS, Feb. - Mar.

2月

- 1日 ・衛星通信利用の公開講座(第3回)
- 3日 ・第6回SCS事業連絡協議会開催
- 5日 ・センター長・部長会議
・第23回全学教育委員会小委員会
- 13日 ・第9回公開講座専門委員会
・第6回北海道地区放送利用の大学公開講座連絡会議
- 15日 ・衛星通信利用の公開講座(第4・5回)
- 16日 ・教務情報システム視察(東京工大1名)
- 18日 ・教務情報システム視察(茨城大2名)
- 19日 ・センター予算・施設委員会小委員会
・SCS視察(メディア教育開発センター2名)
- 20日 ・第28回センター連絡会議
- 23日 ・第11回放送教育専門委員会
- 24日 ・臨時大学院委員会
- 25日 ・「センターニュース」第16号発行
・第2次入学試験(前期)
- 26日 ・第5回教務事務システム専門委員会
・第25回教務事務電算化推進実務担当者連絡会議
・第11回生涯学習計画研究委員会
・教務情報システム視察(電気通信大3名)
- 27日 ・第6回教務委員会

3月

- 2日 ・教務情報システム視察(長岡技術科学大学1名)
- 4日 ・第18回全学教育委員会
・第11回センター予算・施設委員会
- 6日 ・北海道大学放送講座事務担当者会議
- 9日 ・センター長・部長会議
・学生・教務関係掛長会議
- 11日 ・第20回センター運営委員会
- 12日 ・第2次入学試験(後期)
- 13日 ・第29回センター連絡会議
- 16日 ・第6回センター点検評価委員会
・第3回北海道地域衛星通信利用促進協議会
- 17日 ・センター研究発表会
- 19日 ・教務情報システム視察(金沢大学2名)
- 20日 ・大学院委員会
- 23日 ・クラス担任全体会議
・TA研修会
- 25日 ・学位記授与式(学士・修士・博士)
- 26日 ・学位記授与式(水産学部・学士・特設専攻科・修士・博士)
・教務情報システム視察(熊本大学2名)
- 27日 ・学位記授与式(水産学部・学士・特設専攻科・修士・博士)
・平成10年度北海道大学公開講座講師打合せ会議
- 31日 ・SCS視察(国際交流基金招聘研究者(ロシア)1名)

行事予定

SCHEDULE, Apr. - Sep.

	【日(曜日)】	【行事】	【備考】
4月	6(月)	クラス担任代表会議	
	7(火)	新入生オリエンテーション	
	8(水)	入学式	
	9(木)	学部ガイダンス	
	10(金)	第1学期授業開始	
	23(水)~24(金)	1年次履修届受付	
	24(金)	追加認定試験成績締切	
5月	23(水)~24(金)	2・3年次履修届受付	当該学部
	上旬~下旬	定期健康診断	
6月	4(木)	開学記念行事日	休講
	4(木)~7(日)	大学祭	休講
7月	17(金)	第1学期授業終了	
	21(火)~8月18(火)	夏季休業日	
8月	19(水)~21(金)	補講日	
	24(月)~9月4(金)	定期試験	
9月	8(火)正午	定期試験成績提出締切	
	8(火)~11(金)	追試験	
	11(金)正午	追試験成績提出締切	
	中旬~下旬	学科等分属手続	当該学部

編集後記

高等教育機能開発総合センターに新入生があふれる季節になった。1階廊下は休み時間の通行は困難な状況で、トイレは順番待ちの列ができる。農学部や理学部の建物からイメージして北大に入った新入生は、このセンターの建物の老朽化と狭隘さ、とりわけ学生同士交流する場もない状況をどのように思っているだろうか。現在センター建物の改修整備計画が進んでいるが、全学教育の機能を発揮する教室だけでなく、学生たちを失望させない最低限の学生生活環境の整備が必要であろう。(街)

センターニュース 第17号

(北海道大学高等教育機能開発総合センター広報誌)

発行日：1998年4月27日

発行元：北海道大学高等教育機能開発総合センター

〒060 札幌市北区北17条西8丁目

電話 (011)716-2111 ・ FAX (011)706-7854

編集委員：小笠原正明・西森敏之・細川敏幸・

町井輝久・山口佳三

ご意見、お問い合わせは 印の編集委員まで

電話：(011)706-2194; FAX (011)706-4922

インターネット ホームページ：http://infosys.academic.hokudai.ac.jp/center